

この一冊



「ニルスの国の高齢者ケア」

エーデル改革から15年後のスウェーデン

藤原瑠美 著

ドメス出版 本体2500円＋税

本書では、エーデル改革(医療改革)から15年を経たスウェーデンにおける高齢者と、ケアの現場で働く人々の姿を克明に取材している。

2005年から2007年にかけて230日ほど南スウェーデンのエスロブ市に滞在した著者が、さまざまな人々にインタビューを行った力作である。

働きながら認知症の母を介護するなかで、スウェーデンの人間性豊かなケアに触発され、スウェーデンのケアの現場を自分の目で確かめたいと思うようになったという。母が亡くなった後、会社を退職し、実際に行動に移した著者の熱意には敬服させられる。

スウェーデンの高齢化の進行

は先進国のなかでも早く、病院には治療を終えても入院を続ける高齢者が増え続け、莫大な医療費が財政を圧迫していた。

エーデル改革は、このような社会的入院の解消を目的の一つとして1992年に行われた。

この改革によって、退院した高齢者の受け皿を市が責任を持って用意することになった。

エスロブ市では、在宅や特別な住居でケアを受ける人が65歳以上の人口に占める割合は、12・5%に過ぎない。

特別な住居とは、施設という語に代わって使われるようになった語である。そこでは、高齢者の意思を尊重した、細やかなサービスが行われている。

そもそも、エスロブ市には病

院が一つもないというから驚きである。エーデル改革は、医療から予防・保健に社会の軸を転換した改革であるといえる。

多少の障害があっても住みながら自宅での暮らしを続けている高齢者の姿を、多くの写真を交えつつ、生き生きと描写している。

元気な高齢者が増えたことで、エスロブ市の経済状態はよくなり、障害者や子どもへの福祉に多くの支出を割いているというのは注目に値する。

高齢者のひとり暮らしを支えているのは、市の職員や家族、友人などによるケアである。補助器具や在宅安全アラームも大きな役割を果たしている。

高齢者のケアを担う職員の姿

からは、一人ひとりが仕事に誇りを持ち、高いモチベーションで働いていることが伝わってくる。

しかし、エーデル改革の問題点として、医療・キユア(県)と福祉・ケア(市)の間に深い溝があると指摘している。2006年に可決された「高齢者医療・高齢者ケア10か年国家戦略」がこの溝を埋めるものとして期待を寄せている。

さらに、地方自治との関係についても触れており興味深い。県の自主財源比率は約80%であり、そこから医療費の財源を主として賄っている。著者が住んでいる東京都大田区が39%であるのに比べ、地方自治が進んでいるといえる。

エーデル改革前のスウェーデンの高齢者医療は、現在の日本と酷似している。スウェーデンから学ぶものは多い。最後に取り上げている、日本で先進的な在宅医療を実践している医師の例も参考になる。本書から、あべき高齢者ケアの姿について考えていただきたい。